犬にみられる母仔相互作用

―育児放棄について―

上村　菊朗（埼玉県立衛生短期大学）
森永　良子，佐藤　能成（伊豆逓信病院）
岡野　恒也（日本女子大学）

動物では，病気，障害をもつものは，淘汰されるのが自然の摂理であるが，出産直後に母によって，子が死に至る例を経験する。

授乳拒否による子の死亡を間接的な殺害とすると，母による食殺は，直接的な殺害であり，双方とも，育児放棄と考えられる。

授乳を拒否された子犬の生存は長くて2～3日であるが，食殺もまた，生後3日目まで行なわれるように観察される。

特に食殺は，初産による未経験，年齢の若い出産，人や他の犬にふれられた時，などが起こりやすいと経験的にいわれている。また，母によって育てられなかった動物にも，しばしば食殺が起こることが報告されている。

犬の出産，育児を繰り返し，観察の機会をもつと，授乳拒否，食殺による育児放棄を経験する。授乳拒否に対して，食殺は遭遇するたびに，その異様な情景にショックを受けるのが常である。

育児との関連で食殺についての考察を試みた。

症例　1　4回目の出産による食殺

ダルメシアン種の牝である症例1は，群の中で最も安定した犬であり，高い順位にあった。初産，2回の出産は問題なく，子犬は順長に成育した。3回目の出産は，3頭が育ったが，3カ月で一頭が脱肛による感染で死亡した。その後，残った二頭のうち，一頭が4カ月の時に脱肛を起こし生存が危ぶまれた。

離乳後の発達もよく，母子分離も進んでいた母仔は，二頭目の脱肛以後母犬は脱肛の子犬の排泄を介助し，餌を与え，常に行動を共にするようになった。障害をもった子犬は母犬に介助されながら成育していった。母犬の4回目の妊娠は，障害犬の介助を行なっている時期であった。出産は，障害犬と同室の個別ケージ内で行なわれた。出産を確認した8匹は，生後2日目までに，全部母犬によって食殺され，ケージ内に，子犬の姿は確認できなかった。

その後，この母犬は妊娠しなかった。成犬となった障害犬と行動をともにし，排泄の介助，保護は，母犬の死までつづけられていた。

症例　2　2回目の出産による食殺

初産は難産であったが子犬は特に問題なく成育した。2回目の出産で8匹を出産し，6匹を食殺したが2匹は残り生存した。

母犬は，2匹に対してよく保護し，他の犬や人に対して神経質に警戒の姿勢をみせた。2回目の出産は体力的な消耗がみられた。59年2月の出産であったが，この年の冬の寒さは厳しく，他の犬も出産後の子犬の成育はおもわしくなかった。

残された2頭の，その後の成育は順調であった。

症例　3　3回目の出産による食殺

初産は分娩時間が長く産後の回復に時間を要した。出産後，腹部を下に伏せ，授乳を拒否し，出生した7匹は，全部死亡した。

2回目の出産は，6匹出生し，4匹が生存した。この出産は，母犬も妊娠中より安定し，出産間際に，他の牝犬を威嚇するなどの行動がみられた。4匹の子犬はよく保護され，成育した。

3回目の妊娠中に，同時期に同じ牡により妊娠した牝との対立があり，2匹の牝の威嚇，攻撃が繰り返された。この牝は，出産近く負け犬となり，威嚇されつづけていた。3回目の出産はこのような状態の時であり，出生を確認した6匹中，5匹は食殺され，1匹が残された。残された1匹は，症例2と同様に，よく保護し育てた。

同時期に出産した対立していた牝は，出産後の母犬の処置も手際よく，授乳も安定し，産後の回復も早かった。脚をあげ，子犬に授乳する母犬の安定した姿勢は，子犬を食殺した母犬の姿と対照的に観察された。

考　察

ここで取りあげた症例の食殺は，初産でなく，出産の経験の母犬にも起こりうることを経験した。第2例，第3例は，全部を食殺しているのではなく，残した子犬は，むしろよく保護し，母犬として十分な母性をもって育てている。

第1例は，育児のベテランでもある母犬の食殺であり，出産時に，障害をもった犬の保護という育児に等しい役割をもっていたと考えられる。

これらの食殺は，授乳拒否による育児放棄とは異なり，育児に対しての願望は強かったのではないかと推察される。育児に対しての現時点での能力を十分に受容して，食殺が行われているように観察された。

以上の観点より，動物の育児放棄についての検討を進めたいと考える。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

動物では,病気,障害をもつものは,淘汰されるのが自然の摂理であるが,出産直後に母によって,子が死に至る例を経験する。
授乳拒否による子の死亡を間接的な殺害とすると,母による食殺は,直接的な殺害であり,双方とも,育児放棄と考えられる。
授乳を拒否された子犬の生存は長くて2〜3日であるが,食殺もまた,生後3日目まで行なわれるように観察される。
特に食殺は,初産による未経験,年齢の若い出産,人や他の犬にふれられた時,などが起こりやすいと経験的にいわれている。また,母によって育てられなかった動物にも,しばしば食殺が起こることが報告されている。
犬の出産,育児を繰り返し,観察の機会をもつと,授乳拒否,食殺による育児放棄を経験する。
授乳拒否に対して,食殺は遭遇するたびに,その異様な情景にショックを受けるのが常である。
育児との関連で食殺についての考察を試みた。